第三号：第百十八首～第百三十二首

おやさと研究所嘱託研究員
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

辞書では「一条」とは、①ひと筋／一本、②文章の中の一節、③ある一つの事柄、④同じ筋道／道理とあり、また「一筋」と同じ意味で、①ただ一つのことに心を傾けるさま、②ひとかた／普通の程度であるさま、とされる。「おふでさき」においては「神一条」「神の一条」「たすけ一条」「肥一条」「…これが一条」「つとめ一条」「かんろうだいの一条のこと」などと使われており、たとえば「芸一筋」と同じような用法で、人間が親神の言葉を一心に信じることや、親神が人間をたすけたい一心であることを表している。

さて、「おふでさき」には類似した型の歌が多くあるが、三号にだけ末尾が「神の一条」で終わっている歌が二つある。すなわち、「このたすけ百十五歳定命と定めつけたい神の一条」（三号 100）と、「この世を始めた神のしんばしら、早くつけたい神の一条」（三号 118）であり、共に親神の切なる願いを表している。そして、それぞれに続けて「日々に神の心の急き込みを側の者はなんと思っているのか」（三号 101）、「目に見えない神のいうことや為すことをだんだんと聞いて思案してみよ」（三号 119）と「神一条」になり切れない人間へのもどかしさを述べて、さらに、その原因としてそれぞれに「上に立つ者を怖いと思って躊躇っており、神の急き込みを全く恐れていない」（三号 102）、「今の道が上に立つ者の思い通りと思っているが、その心が間違っており、親神の意図に沿うのが筋道である」（三号 120）、「上に立つ者が世界中を思うがままにしているが、これが神の残念であると分からないのか」（三号 121）と、人々が「上に立つ人々」の言うことを親神の言葉より優先していることを指摘されている。このように第三号では「神の一条」を伝えるために、同じような構図を反復して、人々に「上に立つ者」ではなく親神の言葉を聞き分けるように促されている。

ところで、百十五歳と定命を定めたい「神の一条」を詠われた第 100 首では「上に立つ者」にふれた後、「はしら」を入れることや、お秀の魂を返したい旨を述べられて、さらに「二十六日に始め掛ける」ことを明かされていた。それでは、第 118 首で「しんばしら」を早くつけたい「神の一条」と述べた後にはどのような神意を論されているのであろうか。

第三号は、先述の歌に続いて「これまでは世界の全てのことは上に立つ者の思いのままであるが、これからはその現状が変わり、口から出る言葉も変わってくる」（三号 122）、「この世を始めてからは何もかも説いて聞かせたことはないので」（三号 123）、「上に立つ者は世界中を思うがままにできると思っている心が全て間違っている」（三号 124）と「上に立つ者」について述べたのちに、「高山に育つ木も谷底に育つ木もみんな同じことである」（三号 125）、「人間はみんな神のかしものである、神の自由自在の守護、これが分からないのか」（三号 126）と人間の存在の根本について論されている。

つまり、人間の間では、生活の程度によって上下の差はあるかもしれないが、皆親神の子供であることに何ら差別はなく、今朝寝床から目覚めた自分も、「おはよう」と挨拶を交わした家族も、街ですれ違う人々も、すべての人々が親神からからだを借りて生きており、神の全能の働きによって生かされている。この理合いが分からないのか、と親神は人間に問い質しているのである。

しかし、私も含めて、やはり人間はなかなかその神意を納得できず、まして教えを知らない人は親神からからだを借りて生きていることなど想像することもできない。第三号を執筆していた当時と文脈が異なるが、例えば、ある健康食品会社の健康に対する最近の意識調査では、全国 20 ～ 60 代の既婚者（男性 500 名、女性 500 名）の中で、6 割以上の人が「野菜中心の食生活をする」「日常の中でなるべく動くようにする」「規則正しい生活をする」などと自分の健康を維持するための工夫をしたいと答えているが、「実際に行っている」と答えた割合は 2 割ほどに下がり、意識は高くても実際の行動が伴っていないという実態が報告されている。また、健康診断でなんらかの問題があると診断されても、半数以上の人が「自分の健康に自信がある」と回答して診断結果を正しく認識できていないことや、そのような診断にもかかわらず、3 割以上の人が「対策をしていない」と回答しており、その第一の理由としては「自覚症状がないから」と述べて、実感が湧かないとケアに踏み切らないという実態が示されている。つまり、いくら口で説明されても、あるいは検査結果を見せられても、我々は自分の身体について他人の言葉を容易には納得できないのである。

そこで、「おふでさき」は続けて「すべての人はみんな我が身を気をつけよ、神がいつどこへ行くやら」（三号 127）と述べて、口で言って分からないのなら、病気というかたちで神の働きを失う経験をさせようかと注意されている。

さて、このように親神の思いがまったく浸透していない世の中にその思いを伝える人々が必要となってくる。「おふでさき」は再び「木」に喩えて、そのように親神の用事をする人々を「用木」と呼んで、次のように詠われる。すなわち、「ちょっと話するのでよく聞いてほしいが、神の心が急いでいるのは、用木を寄せる段取りである」（三号 128）、「だんだんと立ち木は多くあるけれど、どれが用木になるかは誰も知らない」（三号 129）、「用木といっても少しぐらいではなく、多くの用木がほしいのである」（三号 130）と「用木」の役割を担う人々を大勢必要としていることを述べられている。続いて「用木であるなら、日々にその人を手入れするから、何か不都合が生じてもどこが悪いと更々思わないように」（三号 131）と、親神は見出した人を「用木」になるように色々と心を掛けて育てようとする（手入れをする）ので、その人にとって病気や何か不都合なことが生じても、その事柄を通して神意を学んでほしい旨を伝えて、「同じ木でも何度も何度も手入れするのもあれば、そのまま倒して横たえておくような木もある」（三号 132）と詠われている。

「人材」という言葉があるように「人」はしばしば「木」に喩えられるが、「手入れ」とは辞書的には「よい状態に保つように、整備・補修などをすること」を意味する。「おふでさき」は親神が人材を見出しても「手入れ」する者もいれば、見出したまま「横たえておく」者もいることを述べている。それが親神の「用木を寄せる段取り」なのである。